作品募集

あなたの体験 想いをことばに

# 第21回 ふくい風花（かざはな）随筆文学賞

越前水仙（越前町）

風花とは雪が舞い散る様子を花に例えたもの。この文学賞は、福井県出身の作家津村節子氏の随筆集『風花の街から』によったものです。

特別審査委員長

## 津村 節子

1928年 福井市に生まれる。
1965年「玩具」で第53回芥川賞、1990年『流星雨』で第29回女流文学賞、1998年『智恵子飛ぶ』で第48回芸術選奨文部大臣賞を受賞、2003年「長年にわたる作家としての業績」に対して第59回恩賜賞・日本藝術院賞受賞。日本藝術院会員。2011年「異郷」で第37回川端康成文学賞、『紅梅』で第59回菊池寛賞を受賞。2016年文化功労者。著書にふるさと五部作の『炎の舞い』『遅咲きの梅』『白百合の崖』『花がたみ』『絹扇』ほか多数ある。

## 募集要項

■内　　容　随筆 テーマは自由（人とのふれあい、家族や旅の思い出、ふるさとへの思い、世の中の動きについて考えたことなど）

■応 募 料　無料

■応募資格　高校生以上

■応募規定
- A4判400字詰原稿用紙3～5枚以内（ワープロ可ですが、400字詰原稿用紙に換算して3～5枚に収まっているかを必ず確認してください）
- 作品は日本語で書かれた自作、未発表のもの。新聞、雑誌、同人雑誌、インターネット上などに既に発表したもの、他の文学賞に応募したものは不可とします。
- 作品以外に表紙を付け、題名、氏名（ペンネーム可ですが本名・ふりがなも併記してください）、性別、住所、職業または学校名、年齢または学年、電話番号、公募を知った方法を明記してください。
- 応募は直接文学館カウンターへ持参するか、郵送または電子メールに限ります。（電子メールによる場合は、作品を別ファイルで添付してください。PDF可）※応募作品の返却および選考経過についての問合せには応じません。

■締　　切　平成29年10月31日（火）　当日消印有効

■発　　表　平成30年3月上旬ごろ
（入賞者に直接通知するとともに、福井新聞紙上にて発表します。なお、発表後、ホームページ上に入賞者名を掲載します。）

■著 作 権　入賞作品の諸権利は、主催者側に帰属するものとします。
（入賞作品は、本文学賞の趣旨に沿って、入賞作品集や新聞、主催・共催団体等のホームページ・広報誌等で公表されます。）

■審査委員
- 特別審査委員長　津村 節子（作家）
- 委員　増永 迪男（山岳エッセイスト）
- 中島 美千代（作家）
- 大河 晴美（仁愛大学人間学部教授）
- 泉 志穂（福井新聞社文化生活部長）
- 向井 清和（福井県高等学校文化連盟）

■賞

| | | | |
|---|---|---|---|
| 〈一般の部〉 | 最優秀賞 | 1名 | 30万円 |
| | 優秀賞 | 若干名 | 5万円 |
| | U30賞 | 1名 | 5万円 |
| 〈高校生の部〉 | 最優秀賞 | 1名 | 10万円（図書カード） |
| | 優秀賞 | 若干名 | 3万円（図書カード） |
| | 佳作 | 若干名 | 5千円（図書カード） |
| | 奨励賞 | 20名程度 | 3千円（図書カード） |

**応募先**

〒918－8113　福井市下馬町51－11
「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会事務局（福井県ふるさと文学館内）宛
TEL（0776）33－8866　　Eメール：kazahana@pref.fukui.lg.jp
URL：http://www.library-archives.pref.fukui.jp/

裏面に入賞作品を掲載しております。

《主催》「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会　《共催》福井新聞社、学校法人 福井仁愛学園　《特別協賛》（公財）げんでんふれあい福井財団　《後援》福井県、福井県教育委員会、FM福井

# 入賞作品の紹介

第二十回「ふくい風花随筆文学賞」
一般の部　最優秀賞・福井県知事賞

## 豆腐と三日月様

神奈川県　渡辺　惠子

私は父と合戦場行の汽車に乗り込んだ。

空席を探すと、ボックス席に六十絡みの、おじさんがカバンと風呂敷包みを向かい側の席に並べ、一人で新聞を読んでいる。

「ここにどなたか来られますか？」

と父は遠慮がちに尋ねた。

「いいえ誰もきませんよ。どうぞ、どうぞ」

と荷物を膝の上に載せニコッと笑った。

「じゃ、ご一緒させてください」

と会釈した父は、私を窓側の席に座らせた。

おじさんは新聞を懐にしまいながら、

「どこに行くの？」と言葉をかけた。

「合戦場まで行きます」と言う父に、

「こんな寒い日に子供連れで大変だね……」

と気の毒そうに私達を眺めたこのおじさんは、ごま塩の毬栗頭（いがぐりあたま）で日焼けした丸顔に、眉毛が垂れ下がり、うっとうしそうだ。そのうえ鼻の頭が赤く、笑うたびに鼻毛が出たり入ったりする。

私は可笑しさに耐えかね、窓越しに景色を眺めていた。家や畑や電柱までが後へ、後へと飛んで行く――乗物酔いに罹った私は、目を閉じ、二人の話を聞いていた。

「ところで合戦場には何しに行くんだぇ？」

とおじさんはなれなれしく話しかける。

「三日月神社に、この子の『いぼ』を申し上げ（治癒祈願）に行くんです」

と問われるままに父は答えた。

「あの三日月様は霊験あらたかな神様だから、申し上げると御利益があるよ。それにしてもこんなに綺麗な肌をしてるのに、どこに『いぼ』が出来てるんだね？」

と興味深げに問い返した。

「いや、顔じゃないんですよ。左膝の裏側に粟粒大の『いぼ』が重なり合って出来、体操の時間にブルマーになると、友達に『いぼ貧乏、いぼ貧乏』とからかわれ、あまりに不憫なので、申し上げに行くところです」

と父はありのままに話した。

「そりゃ、気の毒だね。だが三日月様に申し上げれば、必ず治るから大丈夫だよ！」

と自信ありげに私の肩を軽く叩き、一つ手前の駅でおじさんは降りて行った。

「合戦場ぁ～　合戦場ぁ～」

駅員の甲高い声が合戦場駅到着を告げた。

駅前には豆腐屋の大看板が立っている。ここで豆腐を買うことに決めた父が、

「豆腐を一丁お願いします！」

と声をかけた。

「は～い」という威勢のいい返事とともに、姉（あね）さん被りのおばさんが顔をだした。

「三日月様にお参りですか？お寒いのに御苦労さまですね」

と腕まくりして豆腐をすくい敷板（？）に載せて経木に包み、細縄で下げられるようにして父に渡した。

この豆腐は、三日月神社に病気（「いぼ」、「できもの」などの）治癒を願うさいの、お供え物とされていた。

その三日月神社は、うっそうとした木立のなかに、ひっそりと佇んでいた。

社前には敷板に載せた豆腐が沢山供えられ、まるで白い布を敷き詰めたように見える。

父も用意してきた豆腐を、お供えして礼儀正しく拝礼した。私も父に倣い、

「どうぞ『いぼ』が早く治りますように」

と一心に祈った。

父は思い付いたように、私の「いぼ」のあたりをさすり、ふたたび神殿に手を合わせ、長いこと祈ってくれた。

そうして、父はほっとした顔で、

「三日月様に、重ね重ね申し上げたから、必ず聞き届けてくれるよ！」

と力強く言った。私は父のその言葉を素直に受け入れた。

この時、初めて神前にお供えされた豆腐の数だけ、私のように悩み、そして心配する家族達がいることに気付いた。

陽が傾き、日光颪（おろし）が吹きすさぶ。私達は肩をすぼめ足早に駅へ急いだ。

「甘酒」の看板が北風に揺れている。父が甘酒を買ってくれた。店先で甘酒を飲んだり、鼻水をすすり上げたりで忙しいが、この甘酒は凍えた身に泌みわたり美味しい。

ふと、通りを見ると、例の豆腐屋のおばさんが、豆腐と敷板を自転車に積んで、神社から走って来るのが見えた――

父も私も唖然として見送った。

「あれは私達がお供えした豆腐じゃないの!?」と父の顔を見た。「世間には子供の知らないことが沢山あるんだよ」と父は苦笑いして、甘酒を飲み干し……　「寒いから早く帰ろう」と、ラクダ色の襟巻をはずし「真知子巻」のように巻いてくれた。ふわぁ～と父の温もりが伝わり、タバコの匂いが微かにした。

豆腐と三日月様は、九歳の私に、父との忘れ難い旅の思い出も、お授け下さった。